



Photo (c) J.C. Carbonne

日本を代表する建築家 隈研吾さん

2020年東京五輪・パラリンピックのメイン会場となる新国立競技場をはじめ、ホテルや美術館など、地域のシンボルとなる様々な建築物を設計。2019年春の紫綬褒章を受章。

小松の文化と自然を 切り取る断層のような建築

最初に、旧製土所と花坂の山を訪れた際、九谷焼がもつ「場所と素材の結びつき」を強く感じ、建物の設計を行いました。

地層がめくれあがってできた地形のような屋根は大地とつながり、その隙間から人々を出迎えます。内部に入ると全ての部屋はガラスでつながり、裏をつくらず全ての工程が見えるようにできています。

建物自体が、製土・製陶の様々な活動を見せる「断層」のようであり、表面的な九谷焼の姿ではなく、深くその成り立ちを利用者に伝える施設となっています。

建物の一部の壁には花坂陶土を使用した土壁があったり、炭素繊維を土壁のための小舞下地として使用した新しい試みもあり、小松地域が誇る新旧の技芸があってこそ出来上がった建物といえるでしょう。



▶
県産材を使用し、木のぬくもりが感じられ、周囲の田園風景と調和しています。



全国的にも希少な陶石の産地
明治期に欧米でジャパンクタニと称賛された色絵陶磁器の最高峰「九谷焼」。原料となる陶石の主要産地は全国で5カ所ほどしかありません。そのうちの1カ所が花坂町にある「花坂陶石」です。花坂陶石は、江戸時代後期の1811（文化8）年に陶工・本多貞吉が花坂地区で鉱脈を発見して以来、約200年にわたって掘り続けられ、「花坂陶石を使わないと真の九谷焼ではない」という作家もいる程、多くの人々を魅了する九谷焼作品を生み出す源泉となっています。

全国的にも
希少な陶石の産地



花坂陶石場

良質な土づくりに
欠かせない
伝統技法を守る



セラボ・クタニが建設された若杉町では、花坂陶石を粉砕・加工し、磁器土（磁器の素地の元となる土）にするまでの昔ながらの製土技法が今も受け継がれ、九谷の土台を支えています。セラボ・クタニはその技法を引き継ぎ、九谷焼産業に安定的かつ良質な素材を供給する役割も担います。
九谷焼の原点を支え、次世代に伝えていくセラボ・クタニ。ここを拠点に、九谷焼を愛する多様な主体（産学官民）が一体となって、若手クリエーターの育成、販路拡大、情報発信に取り組んでいきます。

「九谷焼創作工房」の誕生
様々な石の恩恵を受けて発展・進化を遂げてきた小松のものづくり。九谷焼もまた、陶石を原料とする「石の文化」の賜物です。日本遺産認定を契機に「セラボ・クタニ」は、石の文化の魅力発信と、九谷焼産業における人材育成・産業観光を目的に整備されました。敷地面積は約2700㎡（木造平屋建て）。陶石加工から素地づくり、絵付けまでの九谷焼制作全般を体感・体験できます。
整備にあたっては、地方創生の取り組みの一環として趣旨に賛同いただいた「小松マテリアル株式会社（能美市）」からの寄付（企業版ふるさと納税）を活用しています。また、建築設計は、世界的建築家である隈研吾氏によるもので、小松の風景に溶け込みつつも、他では類を見ない素晴らしい景観と佇まいが醸し出されています。



Interview

小松マテリアル株式会社（旧小松精練株式会社）
代表取締役 会長 中山 賢一さん

世界的な建築家である隈研吾氏が設計した建物が小松に完成したことは、大変喜ばしいことです。また、九谷焼の原点である土づくりを行う場が整備されたことは、小松市だけでなく、南加賀全体の九谷焼産業の発展につながります。

九谷のルーツ、そしてその原点を守る人たちへのエールを込めて、今後もふるさとを応援し、地域の更なる発展に期待します。



PICK UP

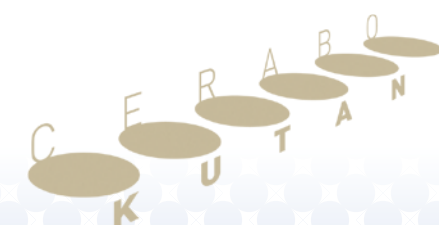
地球にやさしいエコ素材を採用

小松マテリアル株式会社が開発した技術により、建物の屋上にはグリーンビズ（緑化基盤材）、地面には吸水性の高い最先端の素材が使用されています。



問い合わせ 観光文化課 ☎24・8130

5月24日（金）、「九谷セラミック・ラボラトリー」（略称：CERABO KUTANI）が若杉町にオープンしました。200年以上続く小松が誇る伝統工芸「九谷焼」の新たな未来を拓く拠点として活用されます。



特集

九谷焼の未来を拓く

～九谷セラミック・ラボラトリーオープン～

Interview

谷口製土所
代表 谷口 浩一 さん

焼き物の完成品はどこでも見ることができますが、「ものづくりの現場」を見ることができるのは産地だけです。九谷焼ができるまでの過程をより深く知ってもらえる施設として、多くの人に来てもらえたらと思います。



▼陶石を粉碎するスタンパーを有して稼働している製土所。全国的にも希少です。



花坂陶石から磁器土を製造する製土工場を稼働。粉碎から陶土の完成まで、質の高い磁器土を製造する工程を間近で見学できます。

製土工場エリア

希少な陶石の産地であることに加え、粘土加工から上絵付けまでの工程を同一地域で製作していることが、小松の九谷焼の特徴です。それらをまるごと体感できるセラボ・クタニの内部を紹介しています。

九谷焼の「美」と「技」を体感



▲30人規模で利用可能な体験工房。

開放的な 陶芸体験スペース

木質素材と陶器で彩られた体験スペースでは、ろくろ体験、手びねりでの成形体験、絵付け体験など、様々なメニューを用意しています。



温かく出迎えるホールと展示エリア

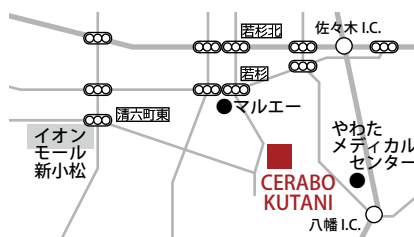
ホールは、花坂陶土を使用した土壁が特徴です。展示エリアでは、九谷焼の製造工程を学ぶことができる常設展示や、新進気鋭の作家たちによる期間限定の作品展示を開催します。



～ご利用案内～ 九谷セラミック・ラボラトリー

所在地 若杉町ア91
開館時間 10時～17時(入館16時30分まで)
休館日 水曜日、年末年始
入館料 300円、高校生以下150円
(市内の高校生以下、65歳以上無料)
体験料 成形・絵付け体験：3,000円～、
ろくろ体験：3,500円～(要予約)
問い合わせ 九谷セラミック・ラボラトリー ☎48・4235

製作に励む作家さんの様子を見学できるかも。私たちがご案内します。気軽にお声掛けください。



セラボ・クタニを拠点に活動する
(左から)緒方 康浩さん、吉田 良晴さん



白山の方向に開けた 外土間

雄大な自然の風景と田園風景に囲まれた外土間は、来館者の憩いの場としてにぎわいとつながりを生む空間を演出しています。



錦窯展示館

昭和初期の木造建築を改修した錦窯展示館は、人間国宝三代徳田八十吉の生家です。古九谷をはじめとする九谷の名品と、徳田家歴代の作品をお楽しみください。

所 大文字町95-1
時 9時～17時
休 月曜日、年末年始
¥ 300円、
高校生以下無料
☎ 23・2668



能美市九谷焼資料館

平成30年にリニューアルオープン。江戸時代から伝わる名品の常設展や九谷焼の制作工程が分かる学習コーナーなど、九谷五彩をイメージした5つの展示室を配置し、異なる展示内容を楽しめます。

所 能美市泉台町南56
時 9時～17時
休 月曜日、年末年始
¥ 430円、
75歳以上320円、
高校生以下無料
☎ 0761・58・6100



NOMI∞KOMATSU

周辺の九谷焼関連施設も
一緒に巡ってみよう！

登窯展示館

八幡における最後の登窯として、昭和40年頃まで使用されていた連房式登窯が保存されています。学習展示棟には陶彫置物の製造工程や地元作家の作品などが展示されています。

所 八幡己20-2
時 11時～15時
休 月曜日、年末年始
¥ 無料
☎ 47・2898



能美市九谷焼担い手 職人支援工房 NEW

九谷陶芸村内に今年4月に開設。工房内の一部がガラス張りになっており、来場者が自由に職人さんの作業風景を見学することができます。九谷焼の魅力や職人さんの技術を間近で感じてみましょう。

所 能美市泉台町南33
時 9時～17時
休 月曜日、年末年始
¥ 無料
☎ 0761・58・2254



Interview

小松市の九谷焼産業をリードする3人に、セラボ・クタニと九谷の未来について伺いました。

みんなで盛り上げよう！
「ものづくり文化」の未来を拓くために



こまつKUTANI未来のカタチ
実行委員会
委員長 浅蔵 宏昭さん

セラボ・クタニは、次世代を担う若手作家の育成、作り手と使い手の交流、そして新たな九谷焼の創造の場として広く活用できればと考えています。

また、市民の皆さんでも普段の生活の中で九谷焼を見に行く機会はありませんでしたかと思いますが、セラボ・クタニに来てもらうことで、幅広い年齢層の皆さんに九谷焼を身近に感じていただければと思います。



小松九谷工業協同組合
理事長 吉田 幸央さん

東京オリンピック・パラリンピック、北陸新幹線小松開業など、今後更に国内外からの交流人口拡大が見込まれます。これらをチャンスと捉え、多くの人に継続して来てもらえるような仕掛けを産学官民連携で考えていけたらと思います。

また、「作り手・ものづくりのまち」小松の魅力を広く発信するため、セラボ・クタニを情報発信基地として活用していきたいです。



石川県九谷窯元工業協同組合
理事長 宮吉 勝茂さん

伝統的な技法で作られる小松の磁器土は、こしがあって成形しやすいのが特徴です。しかし現在、九谷焼製土所は市内にある2カ所のみ。これまで受け継がれてきた伝統を守り、次世代に引き継ぐことがこれからの課題であり、私たちの使命です。

セラボ・クタニ完成を機に、若手作家やものづくりに関わる人が集い、産業全体が盛り上がるきっかけになればと思います。

CERABO KUTANI